

## 翻訳／誤訳(2)——専門用語の解釈——

倉田 清

翻訳の作業で十分注意しなければならないのは、宗教、ことに、キリスト教（カトリック、プロテスタント）関係の用語の訳である。常識的な用語は内容もわきまえておくべきは当然であろう。

例えば、カトリックで、司祭は「神父」（père, father）、プロテスタントでは、「牧師」（pasteur, pastor）。しかし、le Bon Pasteurは「よき牧者」（キリストのこと）となる。contemplationは「瞑想」（méditation）ではなく「観想」。disciplineは「規律」、古い意味で「懲罰のための」鞭。これが複数になると、苦業のための「鞭打ち」である。exercice spirituelは「霊的修業」。spirituelは「精神的」ではない。indifférenceは「無関心」、「冷淡」などのほか、神学で「不偏心」。oraisonは「祈祷」（prière）よりも「念祷」。ordre（order）には、秩序、順序、命令、注文など多くの意味があるが、キリスト教には、「聖職位階」、「聖職者の身分、聖職位」（複数）、「修道会」、カトリックで「叙階の秘跡、叙階式」（複数）、プロテスタントで「按手式、聖職叙任式」（複数）など特殊な意味が数多い。la Passion du Christ'を先年、ある国立大学の教授が「キリストの情熱」と訳して大恥をかけたことがあったが、これは極めて初歩的な常識であって、当然「キリストの受難」。pauvretéは貧困ではなく、「清貧」。prince du mondeは「この世の王子」ではなく、「悪魔」。templeは「寺院」（仏教）、「神社」（神道）、「神殿」（ギリシアなどの）、キリスト教の教会（Eglise）や回教の寺院（mosquée）ではないもの。cathédraleに対して、しばしば大寺院や大伽藍という訳語が与えられるが、仏教的なニュアンスがついてしまう。「大聖堂」である。

以上のような用語の訳については、限りがないほど数多く、また、微妙な問題があるが、原文・訳文の解釈について述べてみよう。

大体、明治、大正、戦前の昭和時代の欧米作品の翻訳文に頻繁に見受けられることであるが、キリスト教的なものを、意識的に、東洋的、日本の

言葉に、ことに、仏教的に置き換えてしまう傾向があったようである。

フランス文学から例をとってみよう。象徴詩以後の最も代表的な詩人の一人、フランシス・ジャム（Francis JAMMES, 1868-1938）の詩に次の一行があり、さる有名な詩人の訳がある。

《L'Angélus sonne.》

訳は「お寺の鐘が鳴ります。」である。この訳文から受け取られるイメージと感覚は、仏教のお寺の鐘の「ゴーン」と鳴って、「諸行無常」の響きあり、ということになりかねない。Angélusというのは、例のフランソワ・ミレーの名画「晩鐘」にあるように、カトリック教会の＜アンジェラスの鐘＞で、朝6時、昼12時、夕方6時に鳴る「カン、カン、カン、カン……」という軽快な、澄み切った音色が直感される。（その時に、「アヴェ・マリア」を唱えるのであるが）。これは、天国への憧れと渴望を表すものであるから、「お寺の鐘が鳴ります」とはしないで、すなおに、「アンジェラスの鐘が鳴っています」と訳せばよいのではなかろうか。

次の例は、かなり面倒な、難しい、しかし、重要かつ重大な問題である。原文の意味を十分把握しておらず、内容を訳者が理解していないからである。

これは、フランスのノーベル賞作家、フランソワ・モーリアック（François MAURIAC, 1885-1970）がイギリスの作家グレアム・グリーン（Graham GREENE, 1904- ）の傑作『権力と栄光』（The Power and the Glory, 1940）に寄せた序文の終わりの方の部分に引用されているスペインの神秘思想家、十字架の聖ヨハネ（San Juan de la Cruz, 1542-91）の文である。訳出しているのは、ある大学の優れたフランス文学者で、筆者とも懇意の仲である。

問題の箇所は、《…（à ces scrupuleux）qui oublie qu' au dernier jour, selon le mot de Saint Jean de la Croix, c'est sur l'amour qu'ils seront jugés.》である。訳文は、「十字架の聖ヨハネの言

葉通り、臨終の日に、彼らが審かれるのは、愛によってである。」一読して理解できるようであるが、＜完徳に取り憑かれた人たちや、小心翼翼とした人たち＞に向けられたモーリアックの批判から判断して、また、語法的な面から解釈して“愛によってである”が曖昧であり、間違っている。

この“愛”は何なのか。「神の人間に対する愛」なのか。「人間の神に対する愛」なのか。「人間の人間に対する愛」なのか。

大体、訳者はこの引用文について、＜出典不明＞と注書きしているが、これは翻訳者の怠慢ということになるか。スペインの神秘思想家の原文は、『AVISOS Y SENTENCIAS』にあって、次の通りである。

◀A la tarde te examinarán en el amor.▶

これを原文通りフランス語に訳すと、

◀A la fin du jour, c'est sur l'amour qu'on vous examinera.▶となる。

まず、語法的に観察してみよう。

◀être jugé sur ~▶は「～によって審かれる」では曖昧である。何らかの動作主補語によって審かれるのであるならば、◀être jugé par ~▶であろう。par ~ でなく、sur ~ であるから、「～

によって」、すなわち、「～にもとづいて」、「～をもとに」であることに気付くのはそれほど難しいことではあるまい。

それでは、「愛」はどのような愛なのか。ただ「愛」と訳したのは、上述したように意味が曖昧であり、十字架のヨハネとモーリアックが言わんとしていることの意味が理解できない。

amor, amour に当たる英語の love を小学館の『ランダムハウス英和大辞典』で調べてみると、「愛、神の愛（慈愛）または神への愛（敬愛）」とある（p. 1526-11）。また、charity を引くと、「キリスト教的愛（christian love）、同胞愛、隣人愛、人間愛、アガペー（agape）」としかない（p. 434）。

charity, charité, caritas の「愛徳」「愛の業」「愛の行い」という意味が、love, amour, amor にも同様にあることを知らなければならない。

また、モーリアックの引用文は、◀C'est sur l'amour qu'ils seront jugés.▶であるが、十字架の聖ヨハネの原文は、◀…… te examinarán en el amor.▶で、「汝は（汝が行なった）愛の業にもとづいて審べられるだろう」である。

（筆者は外国語学部教授）